



不二合金・取締役工場長

銅合金鋳物

遠藤 篤志さん



溶解炉からオレンジ色に溶けた銅の湯を取鍋に取り出すと、男たちは一斉に湯を運び、鑄型へ素早く流し込む。不二合金（堺市西区、遠藤和男社長、072・2622・9440）取締役工場長の遠藤篤志さんも機敏に動き回り、自ら湯を注ぎ指示も出す。鋳物で最も難しく危険な作業だが、「子どものころから運動神経はよかつたんですよ」と屈託がない。遠藤さんはあこがれていた飛行機の整備学校で学び、関西国際空港の輸出入関連企業で半年働いた。銅合金の鋳物を手がける実家の不二合金に舞い戻ったのは2009年。「弟と一緒に遊んでいた」

単品ごとの凝固イメージ重要

懐かしい工場で、技能者の道を歩み始めた。砂型を損なわず木型を抜く手先も器用。「前者が病に倒れ、父親の遠藤社長も経営に忙しかった。そこで遠藤さんは、思い切つて頼み込んだ同業3社で約1年修業。高品質な鋳物づくりを自ら体得し、14年には工場長も任せられた。遠藤社長は「何人も見てきた鋳物職人中でもセンスのよさを感じる」と、後継者の成長に目を細める。鋳物は溶かした金属が図面通り固まるイメージをして、適切な鋳型や流し込む位置を決めないで、品質がよくならない。しかも不二合金は単品生産で、一つずつ判断が異なる。遠藤さんは頭を働かせ

るイメージが好きで、砂型を損なわず木型を抜く手先も器用。「前者が病に倒れ、父親の遠藤社長も経営に忙しかった。そこで遠藤さんは、思い切つて頼み込んだ同業3社で約1年修業。高品質な鋳物づくりを自ら体得し、14年には工場長も任せられた。遠藤社長は「何人も見てきた鋳物職人中でもセンスのよさを感じる」と、後継者の成長に目を細める。鋳物は溶かした金属が図面通り固まるイメージをして、適切な鋳型や流し込む位置を決めないで、品質がよくならない。しかも不二合金は単品生産で、一つずつ判断が異なる。遠藤さんは頭を働かせ

井茂
（南大阪支局長・田
（水曜日に掲載）